

## 開放図書館の役割と課題

鈴木 斐奈

学校施設の開放は、都市の過密化によって失われた子どもたちの安全な遊び場を確保するために実施された。この学校施設開放の一環として、学校図書館の地域開放は1969年に神戸市から始まった。学校図書館の今後を考える際、子どもの読書サポーターズ会議では、学校図書館の新たな機能の中で、児童生徒の心の居場所及び地域住民にとっての生涯学習拠点となることを述べており、今後はこうした多様な機能と役割が期待されていると考える。従来の学校図書館における研究は、児童生徒や教職員への支援に焦点を当てたものが多く、地域開放を通じた新たな機能について触れている例は少ない。また、地域開放に取り組む学校図書館（開放図書館）の事例を比較検討した報告も、1980年代までに執筆されたものがほとんどである。したがって、地域開放事業に関する現状とともに、開放図書館が地域社会や学校教育にどのような影響を及ぼしているのか把握する必要がある。また、上述した学校図書館の新しい役割が実際の地域開放事業において適応されているのかどうかを明らかにする必要がある。そこで本研究では、学校図書館における地域開放の現状と開放図書館の役割を明らかにし、それに伴う諸課題を考察することを目的とした。

研究方法は以下の2点である。まず、学校図書館の地域開放事業がどのように発展してきたのか、その経緯を明らかにするため、文献調査を行った。次に、地域開放事業の具体的な活動内容及び事業に対する担当者の理解度や意識を把握し、今後の課題を明らかにすることを目的として、聞き取り調査を行った。聞き取り対象は学校図書館地域開放事業の担当職員であり、地域開放事業に30年以上取り組んでいることを対象校の選定基準とした。

文献調査から明らかになったことは、学校施設開放の一環として始まった学校図書館の地域開放事業において、時代の流れとともに開放図書館がその役割を変化させてきたことである。事業開始当初は単なる設備や空間の開放であったが、1970年代以降、生涯学習の重要性が高まるとともに、学校図書館機能の提供を通じて、児童生徒や地域住民にとっての生涯学習拠点となることが要請されたのである。

また、聞き取り調査からは、文献調査で示された開放図書館の役割が実際の事業においても果たされていることが明らかになった。ボランティアや利用者が開放図書館の意義と必要性を感じる一方、事業開始当初から様々な課題や問題点が上がっており、現在、各自治体に共通する課題は事業予算とボランティアの確保である。

以上2つの調査から分かったことを踏まえ、考察を述べる。開放図書館の存在意義としては、利用者やボランティアの知的欲求に対する興味や喜び、人生観に影響を与えること、子どもから大人までの世代間交流を促しやすく、新たなコミュニケーションを構成する場となることが考えられる。現場で直接携わるボランティアが開放図書館の意義と必要性を見出し、地域開放に取り組む学校図書館の数も一定を保っていることから、学校図書館の地域開放事業は今後も更なる発展が期待できると考える。(指導教員 平久江祐司)